

勤務医部会だより

コロナでぎりぎり



幹事 味岡正純
(公立陶生病院 院長)

2020年1月にたまたま仕事の少ない期間があった。1月10日からの一週間で、お正月休みの旅行者は帰ってしまい、1月24日から始まる春節休みの中国人旅行者の混雑も始まっていない時期で、海外に出るにはもってこいの時期である。日本が極寒の季節だから暖かで開放的な雰囲気に浸ろうとハワイに出かけた。すでに中国武漢市での新型コロナウイルス感染のニュースは聞こえてきていたが、自分たちには遠い話のように感じ、危機感を持っていなかった。1月前後のハワイは雨季とされているが、多くはたまたまシャワーがザーと降る程度と思っていたが、2020年は今までに経験がない雨続きで終始した。ビーチやプールに出かける機会も少なく、ショッピングセンター巡り中心のスケジュールとなったが、どこに出かけても真っ赤なちょうちんや飾りつけが目につき、やがて大挙押しかけてくる春節の中国人旅行者を迎え入れる準備が進んでいた。雨続きであったので、アクティビティにも気が向かず、毎日のようにホテルのジムに足しげく通って汗を流した。

皮肉なことに帰国する日に天候は回復し、南国らしいきれいな青空を恨めしく見上げながら空港に向かったのを覚えている。帰国して2週間余り後に、我々より少し後にハワイを訪れた名古屋市のご夫婦が、中国人旅行者の置き土産のウイルスを持って帰国され、名古屋市で初のCOVID-19感染者となったのはご存じのとおりである。我々は、まさにぎりぎりのタイミングの時期に出かけていたわけで、運がよかったとしか言いようがない。

その後日本でも各地で感染者が報告され始め、「クラスター」という今まであまりなじみのなかった言葉が毎日のニュースのトップを飾ることとなってゆく。大勢が集まる学会や講演会も次々と中止や延期が決定されかけていた。

そのような中、2月11日に陶生病院は大事なイベ

ントを予定していた。足掛け10年にも及んだ建て替え事業の最終段階も順調に進み、最後に残っていた平面駐車場の整備や敷地内薬局棟の完成を受けて、「新生陶生病院グランドオープン」の祝賀式典を行うことになっていたのだ。コロナ感染の足音が迫りつつある中での式典ということで多少の迷いは頭をよぎったが、予定通りに決行と決めたところ、瀬戸市長はじめ大勢の方にご出席いただくことができた。三密という言葉はまだ発信されていないときであり、式場の入り口での手指消毒もなければ、来賓の方々にマスクを着用していただく呼びかけも必要なかった。今までどおりの式典を行うことができた最後の機会であり、これもまさにぎりぎりのタイミングの時期に行えたわけで、運がよかったとしか言いようがない。

この後、世界中をコロナ感染が蹂躪し始め、わが国にも容赦なく攻め込んできた。そんな時に、当院には貴重な感染症専門医が戻ってきてくれていた。武藤義和医師である。彼は当院にて研修医生活を過ごしたあと、感染症専門医となるために国立感染症研究所に進み、エボラ出血熱の患者の治療にも携わったこともある正真正銘の感染症専門医なのだが、たまたま当院に戻ってきてくれていたのである。この忌々しいウイルスがいつ院内に忍び込むかもしれない危険な状況を乗り越えるには、武藤医師の力を借りるしかないと考え、週に二回の病院首脳の間接会議には必ず武藤医師にも参加してもらい、会議の冒頭に、COVID-19に関する愛知県の現状から当院周辺、そして院内の状況まで、彼の分析と今後の方針に関する提言を聞き、知識と意向を共有したうえで実行してゆくことを始めた。

それ以来おおよそ一年が経過した。気が付くと当院は、多くの新型コロナ感染患者を受け入れながら、一度も院内感染を起こさずに済んでいた。これに関しては、我々はぎりぎりではなく十分に余裕をもって間に合ったと言ってよさそうである。

病院の受診患者は大幅に落ち込み、病院の運営は厳しい状況が続いている。COVID-19は首都圏を中心に、新たな感染者数が新記録を更新し続けている。その一方で、ワクチン接種は海外ではすでに始まっているが、わが国ではまだまだである。間に合うのだろうか？感染症におびえ、凍え切った住民の心に何とかぎりぎりのタイミングで、ワクチンが安心の気持ちを届けてくれることを願っている。